

敷地形成論から見た緑地の序列性に関する研究

京都大学大学院工学研究科 学生会員 ○辰巳 聡一
 京都大学大学院工学研究科 正 会 員 山田圭二郎
 京都大学大学院工学研究科 フェロー 中村 良夫

1.はじめに

敷地は、自然や地形に対して人工的な造成行為が加えられる過程で、地形、平場、建築、道などの異なるシステムが複合的に組み込まれ、体験されるものと考えられる。またこのような敷地造成という自然改変行為の中で、なまの自然から庭園、盆栽、いけばなに至るまで、様々に形を変えた自然（緑）と身近にふれあう術を日本人は持ち得ていたと考えられ、それは現在直面する、自然保護と開発との間の相互秩序形成に大きな示唆を与えてくれるであろう。そこで本研究では、山裾に立地する寺院敷地を多層的に把握する 図 1 とともに、それを一手段として用い、寺院敷地内における緑の、人間の生活空間からの距離を尺度とした序列性を見出すことを目的とする。

2.寺院内の敷地構成

本研究では、知恩院を研究対象とした。知恩院敷地の把握のため、京都市都市計画地図（1/2500）を使用、これをもとに知恩院敷地を構成要素別に分けて多層構造化（ここでは多層構造化した敷地構成要素の各層を「レイヤー」と呼ぶ）した。

まずこれら要素の中から敷地の基本構成要素として、地形・平場・建築物・道・水の5要素を抽出し、この5要素によって他の要素の存在が把握できるかを見てみる。地形・平場・道・擁壁の各レイヤーを重ねてみる 図2と、擁壁は、地形と平場の接触線上および地形と道が密に交差しているところに存在していることが分かる。

従って図2から擁壁レイヤーを除いた図3で、擁壁の存在が説明できることが分かる。同様にして、他の敷地構成要素をレイヤー間の相関によって説明できる 表1。よって、ある要素の存在を別の複数の要素によって説明可能でかつ、それぞれの要素はすべて、基本の5要素によって説明できる事が明らかになった 図4。また多数のレイヤーが重層する地点は、特に景観上重要な「景観的特性点」として指摘できると考えられる 写真1。

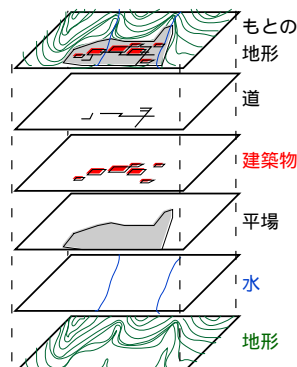


図1 多層的把握



図2 地形・平場・道・擁壁レイヤーの重ね合わせ



図3 図2から擁壁レイヤーを削除

		敷地基本構成原理 (5 Fundamental Elements)	その他の敷地構成要素 (other elements)
		1.地形 2.平場 3.建築 4.道 5.水	a.擁壁 b.階段 c.カコヒ（塀・垣） d.空間 e.庭園 f.門
敷地構成要素	a.擁壁	[1-2-4]	
	b.階段	[1-4]	[d-d]
	c.カコヒ（塀・垣）		
	d.空間	[(1)-2-3] 分節化→	[c-d]
	e.庭園	[1-2-3-5]	d, [c-d]
	f.門		[4-[d-d]]

表1 要素間の相関による敷地構成要素の説明

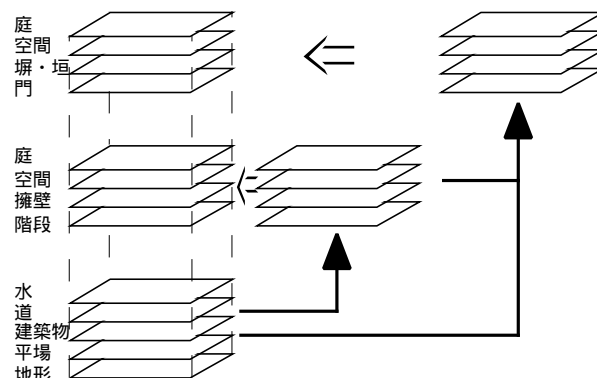


図4 敷地構成の多層的把握

キーワード：敷地，多層的把握，緑，序列性

連絡先：〒606-8501 京都府京都市左京区吉田本町 TEL 075(753)4788 FAX 075(753)4789

ここで、敷地内の緑地について注目してみる。緑地は原地形に様々な物を造っていく過程で生じた隙間に生じることが多い。そこで地形・平場・道・擁壁、それに知恩院中段の主要な建築物とそれに付随する塀を示した主建築のレイヤーを重ねてみる 図 5 と、以下の 6 つの空間が生じる。すなわち、

A. 知恩院中段

- a) 建築物のみで囲われる空間
- b) 建築物と、塀・擁壁に囲われる空間
- c) 主建築（建築物・塀）と道によって囲われる空間
- d) その他

B. 平場間

C. 知恩院下段

である。緑地はこの空間のいずれかに存在している。そこで次に、緑地の囲まれ方を考慮して緑の序列性を見てみることにする。

3. 緑の序列

最も人間の手を加えられていない、生活空間からは遠いもの、のように考えていくと、6 つの空間には、生活空間から近い方から以下のような序列が見出せる。

A.a)→A.b)→A.c)→A.d) , C.→B.

そしてこれらの空間に形成される庭をこの序列に当てはめると以下ようになる。

坪庭→露地→中庭→側庭→前庭→庭園→山 ... (1)

次に知恩院敷地内の庭を、江戸時代の建築配置をもとに、視覚的つながりによって序列性を見てみる。即ち自然の山から、視覚的にお互いの位置が確認できるものをスケールの大きい方から矢印でつなぐと、矢印の方向に人間の生活に近い存在になっていくと考え、図 6 より以下の序列が見出せる。

中庭 1, 3, 5→中庭 2, 4→方丈庭園→斜面庭園→森 ... (2)

なお、中庭 1 は飛び石や灯籠があり、露地的な雰囲気を持つ庭である。

さらに身近な室内自然に関して、いけばなと盆栽を考えると、盆栽はもともと室内にいる人の目を庭に向けさせる意図で、庭先や縁側に置かれることが多かった 図 7 。従って、

いけばな→盆栽→庭 ... (3)

という序列が見出せる。

以上(1)～(3)をまとめると、以下のような緑の序列性が導き出せる。

いけばな→盆栽→坪庭→露地→中庭→側庭→前庭→方丈庭園→斜面庭園→森→山

4. 結論

(1) 寺院内敷地を、多層構造的に把握することが可能かつ有効であることが明らかになった。また、地形・平場・建築物・道・水の 5 要素で、他の要素の存在説明が可能であることが明らかになった。

(2) 寺院内の緑に関して、人間の生活空間からの距離を尺度とした序列性が見出せることが明らかになった。この序列が、日本人が大自然を身近に取り込んできた軌跡であり、そこには日本人が、自然とつきあう上で自然に畏敬の念を抱きながらも、うまく手を加えてお互いの関係を築いてきたその跡がうかがえる。そうした過去の巧妙な自然とのつきあい方は、これからの都市計画にも活かし得るであろう。



図 5 地形・平場・主建築・
道・擁壁の組み合わせ

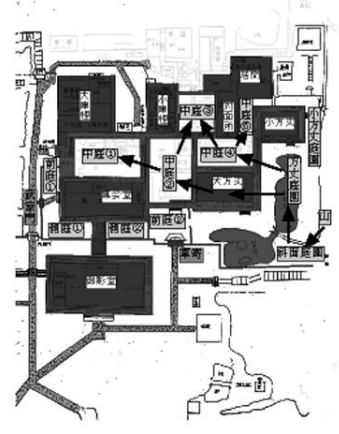


図 6 庭の視覚的つながり

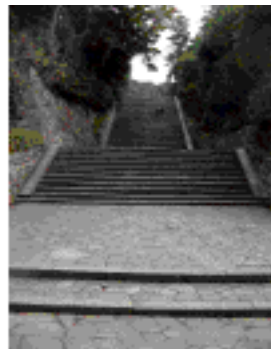


写真 1 特性点

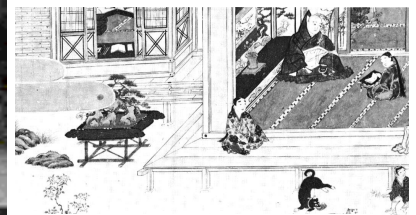


図 7 「慕綿絵詞」での盆栽